平成 24 年度組織的な大学院教育改革推進プログラム
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」
「キャリア形成のための院生自主企画」実施報告

Ⅰ．自主企画の内容

（1）企画の名称

「幼稚園教育・保育の実践に学ぶ」−保育はアート、アートが保育?！−

（2）開催日時・会場

2012 年 6 月 30 日（土）　10：00〜12：00　S 棟　S128 教室

（3）講演者

佐木みどり（揖斐幼稚園　園長、岐阜聖徳学園大学教育学部 准教授）

（4）企画者

柘植　彩	人間文化研究科博士前期課程　人間行動科学専攻　人間関係行動学コース
八重　彩	人間文化研究科博士前期課程　人間行動科学専攻　人間関係行動学コース
小槻　智彩	人間文化研究科博士前期課程　人間行動科学専攻　人間関係行動学コース
落合　良香	人間文化研究科博士前期課程　人間行動科学専攻　人間関係行動学コース
持田　有香里	人間文化研究科博士前期課程　人間行動科学専攻　人間関係行動学コース
辻田　奈保子	人間文化研究科博士前期課程　人間行動科学専攻　人間関係行動学コース
中江　美智子	人間文化研究科博士前期課程　人間行動科学専攻　人間関係行動学コース
藤村　ゆうみ	人間文化研究科博士前期課程　人間行動科学専攻　人間関係行動学コース
松原　未季	人間文化研究科博士前期課程　人間行動科学専攻　人間関係行動学コース
羽室　千香	人間文化研究科博士前期課程　人間行動科学専攻　人間関係行動学コース
篠原　亜耶	人間文化研究科博士前期課程　人間行動科学専攻　人間関係行動学コース

（5）支援教員

麻生　武　　（人間文化研究科　人間行動科学専攻　教授）

（6）参加人数

12 名（内訳：[学内]大学院生 11 名、[学外]1 名）

（7）自主企画概要

幼児教育は子どもたちが人生の最初に出会う教育であり、まさに「生きる力」の根幹を築くために非常に重要な教育であるといる。幼児教育に携わる教師や保育者には、子どもたちを主体的

にとらえ、子どもたち自身の「学び」を支えるためのより専門性の高い実践を行う力が求められる。本企画の講師である佐木みどり氏は、岐阜県にある揖斐幼稚園の園長として、子どもたちが「将来、社会において自分の力で生きていけるように育つことを支える」教育を実践している。揖斐幼稚園の「Hakken to Boken project（はっけんとぼうけんプロジェクト）」と名付けられた科学とアートのプロジェクトについて佐木氏より紹介いただき、幼児教育・保育の実践におけるアートとは何かなど、これからの幼児教育のあり方について講師と意見交換を行うことを企画の目的とした。企画者は、人間行動科学専攻にて心理学を専攻する大学院生であり、将来幼稚園教諭や保育士、臨床発達心理士として、幼児教育や子育て支援、療育などの支援職を目指す者も多い。本企画を通して、子どもの育ちを支える支援者としての姿勢を学び、また直接意見交換を行って、それぞれ教育現場に出たときの実践に、どのように活かしていくことが出来るかを考えるためのプログラムとした。

Ⅱ．実施報告

1.講演会の内容

1.1 揖斐幼稚園の紹介 VTR 鑑賞

揖斐幼稚園で行われている実践についての具体的なイメージをもって講演に臨めるよう、幼稚園の紹介と「はっけんとぼうけんプロジェクト」の紹介ビデオを鑑賞した。

1.2 佐木みどり氏の講演（要旨）

＜保育観・子ども観の重要性＞

幼児教育は誰にでもできるもの（父母、祖父母など）だが専門性が見えにくいものである。また幼児教育・保育の指導書は小学校以降のものに比べて薄く、そのためその指導書をどのように解釈するかでカリキュラム、子どもへの関わり方が変わってくる。現場にいる人、幼児教育・保育をする人、研究をする人にとって保育観・子ども観をつけることは重要なことである。

＜保育形態＞

◎設定保育：保育者が子どもにやらせるべきことを決めているため、遊びの内容は課題になり子どもとの相互性がなくなってしまう。

◎自由保育：子どもが主体的に環境、物、人と関わりながら遊びや活動を展開していくが、そこでは保育者の力量が問われ、ほったらかし保育になる危険性がある。遊ぶものがあちこちにあるがゆえに、主体的に関わっているようで実はただ好きなことをやらしているだけかもしれない。そこから深めていくためには保育者の力量が育っていなければ難しいものである。

◎一斉保育：自由性と肯定感があり、環境を変容できる柔軟性と幅があれば自由保育の中に入れることができるのではないか。

＜幼児期の特性＞（ヴィゴツキーの理論より）

◎自分のプログラムで行動する：子どもは自分が関心を持ってはじめて物事に取り組み、そこから知識や技能を獲得していくので、子どもの興味・関心を引き出すことが重要になってくる。

◎個人差が大きい：幼児期の子どもは体験によっての差が表れやすいため、園に入ってきたときのできる・できないで個人の能力を決めるのは間違い。そこには親の人生観・子育て観の影響による影響が大きい。入園時にハサミを使えない子どもがいた場合、それはハサミを使うことができないのではなく、これまでそういった体験をしてこなかったということである。子ども一人ひとりの育ちの道筋は異なり、ある目標への到達の仕方は様々である。

◎発達の危機（＝育つとき）

・「障害があるかどうか」が顕在化するのは 1 歳頃

〈着目点〉：1 歳で歩くことができるかどうか

10，11 カ月で指差し行動が生じるが、1 歳を迎える頃にそれが完全にできるかどうか

“閉じた円”が描けるかどうか（→知的障害がある場合、閉じた円が描けない）

・1 歳…自我が芽生える時期（＝人間が知的存在だと分かる時期）

3 歳…“やれる自分”と“やれない自分”の狭間にいる時期

6 歳…思いやりやセルフコントロールができるようになり、他者理解が生じる時期

・「幼児期」＝母親が子育てを大変なものだと感じる時期

例：散歩に出かけた時、子どもが「こっちに行きたい」と言ったためにそちらに行くと、「こっちは嫌だ！」と言う。→こういった場合には、母親は「どっちがいいの？」と聞くことで、子どもに選択肢を与えてあげれば良い。

＜幼児期にふさわしい生活＞

◎保育者との信頼と共感的関係：愛着を形成することの重要性→母親との愛着に加えて、子どもは保育者とも愛着を形成しなければいけない。

また、保育者を“愛着の基地”にしなければいけない（＝そこから信頼と共感が生まれる）。

◎興味や関心が重視された生活

◎友達と充分関わって展開する生活：近年は少子化になってきているため、集団の施設内ではできるだけ友達との関わりが生じるような援助をしなければいけない。

→ただし、“子どもが一人でいる時”も大切であり、これは子どもが情報を収集している時であると考えられる。

→友達との関わりを求めているが、それができずにいつも一人でいる子どもに対しては、保育者がその子の遊びに付き合ってあげる（＝このことで他の子どもたちが自然に寄ってくる）。

◎遊びを重視した生活

◎「総合的な指導」（領域別指導ではなく）

例えば、「“砂場遊び”という活動の中に全ての領域が含まれている」という考え方

→教科的なモノの見方ではなく、遊びを中心とした生活が関わってくる

例：「絵を描く」、「モノをつくる」といった活動→「ただ“表現”という領域だけを行っているのではなく、この活動は人間関係や情報交換、その場で適切な言葉を用いる力、片付けなど

といった、様々な指導が行える活動なのだ」というスタンスに立つ必要がある。

＜「はっけんとぼうけん」の生活①＞

◎日常性の重視　→日々の生活に根差す：打ち上げ花火のように一回きりで終わるのではなく、それを根差していくことで“文化”として残すことを重視する。

◎子どもの興味、関心の在処を探る

保育者が子どもとやり取りをする中で、子どもの興味、関心を探っていく必要がある（＝そのためには、子どもの遊びをよく見ていないといけない)。

◎応答性

［応答性］　子どもが「ねぇねぇ、先生！先生！」と言って呼びかけているにも関わらず、先生からの応答がなければ、子どもは手応えを得られない。

しかし、30 名ほどの子どもの呼びかけに対して、一度に先生が応えることは難しい。

→このような場合には、「今、この子のその時が本当に大切、必要だ…」という瞬間を逃さないことが大切（＝他の子どもに対しては、「ごめんね、今、先生は〇〇やっているからね…」と伝えたうえで、あとから「さっきのお話、何だった？」と聞いてあげる)。

［子どもが関わり変容させられる材料、素材］　“手を加えれば変容できる”モノを重視する。

例：積み木→四角や丸い“積み木”というおもちゃが、子どもによって積み上げられることで、ビルにもなれば、基地にもなり、車にもなる。

◎探索できる、試行できる　→揖斐幼稚園の保育理念

「子どもの行為を受けとめ、認める」ということがベース

子どもが「なぜだろう」、「どうしてだろう」と疑問を持ち、それについて自分で探し、求め、試すという生活を実現させる。

「探索できる、試行できる」とは、“限られた中での自由な雰囲気”と“子どもが制御できる時間と空間を保障する”ということ。

◎直接的体験の重視

→子どもたちが実際に体験をすることを重視している。

例：虫とりや泥遊びが思いっ切りできるような環境を整える。

お餅つきをする場合ならば、「もち米を育てることから始め、苗を育て収穫し、それを蒸して食べる、お餅にカビが生えるところを見る」といった一連の体験を子どもにさせてあげる。

＜はっけんとぼうけんの生活②＞

揖斐幼稚園では、教師が皆、子どもが「自分の世界」を作ることを重視しており、作品・アートという総合的な活動を通して全ての領域を育てている。例えば、作品が完成し「できた！」と

見せに来た子どもに対し、「上手にできたね」と褒めるだけでなく「ここのところ、もう少し丁寧に色を塗ってみたらどうかな？」などと提案をする。これは、子どもが「できた！」という時から、保育者の指導・援助が始まり、そこから子どもの世界作りが始まる、という考えに基づく。また、子どもが友達の作品を「真似」することや、代わりに先生が描いてあげることも良しとしている。まずは自分がいいと思ったものを真似する、しかし同じものを作ったつもりでも全く同じものにはなり得ないし、そうするうちに必ず自分のものになっていくのである。自分で描くことが難しい子は「先生が描いてくれた」という嬉しさが残り、同様にそのうち自分の形で描き始めることができる。

＜アートと保育＞

日々の生活の中での体験の積み重ねが、「作品」に表れている。落書きのような絵や砂場で作った砂山でさえも作品である。また、子どもたちが作った作品を飾っておくことで、それが刺激となってまた絵を描き始めることがある。ブロックなど作りかけの作品は、また続きができるように、必ず分解せずにそのまま取っておく。作りつつある「作品」が生活に刺激を与える。このこと自体がアートなのである。また、子どもたちは相互にやりとりしながら遊びを作り、展開しており、そうした遊びそのものもアートだといえる。ままごとはごちそうのアートであり、ごっこ遊びでなりきって遊ぶ、つまり体現している、それこそアートなのである。

子どもたちが生活の中で、「なんだろう」「やってみよう」「どうしてだろう」「おもしろそう」の体験がのびのびとできる自由性が必要であり、そうして自分で表現したことを大人に「それは面白そうだね！」と認めてもらうことが、彼らにとってとても重要である。そのための前提として、できるだけ子どもたちがやりたいことをできる環境を作ること、具体的には豊かな材料や使いやすい道具の準備、大人の援助などが必要となる。そして「本物」つまり自分の「世界」を作ろうとしている人（保育者、アーティスト）との出会いが、子どもの「世界」作りに影響を与える。

＜幼児期の子どもの「作品」って何だろう？＞

遊びの痕跡、「実験」の跡（試してみたこと）、その子の現在の興味・関心の表れ、発達の姿、様相など、様々なものが表れており、これらはつまり、これまでの体験の積み重ねの表出・表現なのである。津守真先生も同様のことを書籍で述べている。

＜「はっけんとぼうけん」プロジェクト「おる・つなぐ・ことば」＞

◎2011 の「相川恵ワークショップ」を中心に

【相川氏の「作品性」】

とあるアーティストは、「イメージを作り上げてからそのイメージを実現していく」と述べたが、相川氏は「最初にイメージを作るが、作りながらイメージを変えていく」と言う。これは、幼児期の子どもの「作品性」と共通すると感じ、そうした柔軟性をもったアーティストだからこそ園に招きワークショップを行った。子どもは「遊び」ながら、どんどんイメージを変容しており、例え同じテーマであっても表現されているものはどんどん変容しているのだ。それに付き合い、一緒に考え、必要なものは何かを考えるのが保育者である。

【相川氏の「作品」に取り組む姿勢】

新人賞をとったテキスタルアーティストである相川氏の作品は、明るい色彩で幼児に合うものだと感じた。氏は夢中になって面白そうに取り組み「世界」を広げようとしている。それに応じて先生たちも面白がって取り組んでいく。子どもと関わりながらも、その都度対応していて柔軟性があり様々な素材や材料を試そうとする。作りながら試行錯誤し、考えていくやり方である。

幼児と生活するときに大切にしていることは、幼児を対等な他者として扱うことと考えている。持っている技能、知識を駆使して表現しよう、体現しようとする子どもの、人間としての重みは対等であり尊重しなければならないと考える。

どのアーティストにも求めることは、自分の領域を守る、自分の世界を守りつつ相手を尊重することである。子どもに何かやらせようとか、自分の世界がしっかりしていないのに子どもに寄り添って取り組むアーティストもいるが、それでは保育者にとっても学びがない。以上のことから相川氏と園の保育観、子ども観、アート観は共通であると言える。

＜生活に根ざす保育の紹介（写真による紹介）＞

5 月　さくらんぼ取りの様子：色との出会いがある。

泥絵の様子：園庭には赤土や黒土があり、泥で絵を描く（クレパスの茶色は泥の色ではない。）

6 月　三つ編み遊び：6 月に入り、お話作りが子ども達の間で流行った。子ども達は役になるために服やお面が必要であり、同様に三つ編みもいる。そこから遊びが広がった。

相川さんのワークショップ：メリノボール→相川さんが染めた羊毛やいろいろな素材を使って様々な形のボールを作成する（平たい、長い、etc。）

7 月　虫取り：園庭にはたくさんの木があり、多くの虫がいる。子ども達は虫のお面をつけクワガタとなって虫取りをする様子が写されている。

親子での遊び：子ども達がなりたい〇〇の衣装を作る。園では親子が遊ぶということを重要視している。親も作るが、子ども達も自分たちで作り子どもの体験として生きる。

お泊り保育で作った花瓶：園庭の花を飾り、花瓶の模様を作る。これも作品の一つとしている。

8 月　相川さんのワークショップ：独創的な子どもの織物の作品。

9 月　紙芝居つくり：子どもが様々な話を作り、先生がそれとなく誘導して一つの話にまとめる。

10 月　稲刈りの様子：藁も教材になり、織物の材料となる。

11 月　「はっけんとぼうけん　パート１」前の遊びの様子：砂場のパーティー、自分達で作った衣装を着て遊ぶ様子。

はっけんとぼうけん　パートⅠ　発表会の様子。舞台上のものは子ども達が作っている。

〇「はっけんとぼうけん　パートⅡ」：作品展の作品　ex 立体的、穴を開けるなど→相川さんの織物が生きている。

〇ひな人形：自分がなった役を作品として作っている。

例）テーマがナウマン象、天気に沿って作っている。　→ここでも織物が生きている。

1.3 質疑応答　（東村知子先生も交えて）

〇出席者から「こどもの興味や関心を引き出せるような教育を、新任保育者に対して行っている

か」との問いが発せられた。それに対し、「こどもと『並び合』って一緒に遊び、やりとりを通してこどもの興味・関心を掴むことが大切だと伝えている」とのことだった。幼児教育は遊びを通してこどもを育てるもので、こどもは好きな先生が夢中になることに関心を持つため、先生が自身の興味・関心に敏感であることは良いことだとおっしゃっていた。

〇次の質問では、揖斐幼稚園での保育者の採用基準に話が及んだ。揖斐幼稚園では先生同士の仲が良く助け合う雰囲気があるので、その仲間になってくれるような人を採用したいと話しておられた。幼稚園の保育観と保育者個人の保育観に違いが生じることはないかという質問も寄せられた。そういうことの無いよう、採用したい人には園を納得できるまで見てもらうそうである。また佐木先生ご自身の学生に対しても、自分が行きたいと思う園によく足を運び、先生方と話し、ボランティアなどで中に入ることを勧めておられるそうである。また、保育者になりたい学生に向けては、同じ園で仕事を続けることが生きがいの発見につながること、園が手放したくないと思う先生になることなど、就職に関するアドバイスもいただいた。

〇今回の企画のきっかけを下さった東村先生は、揖斐幼稚園の活動や、こどもたちの作品、先生方の真剣な様子などから「こんなに面白い幼稚園があるのか」と感銘を受けたと話して下さった。それに応えて佐木先生は、揖斐幼稚園には保育者を育てていこうという意識があること、先生方も知識だけでなく「やる気」で仕事に取り組み、こどもと関わる楽しさを理解してくれていることなどを話して下さった。

〇佐木先生によれば、保育の質とこどもの育ちは先生によって決まる。よい保育とこどもの育ちのためには先生自らが「考える」こと、「問いを立ち上げる」ことが大切で、それをやめてはいけないと教えて下さった。

2. 参加者からの声：アンケートより「今回の企画に参加してみてどうでしたか？」

・子どもの持っている可能性を知り、保育者の関わりによって変わることを知り、自分自身の仕事への取り組み方、関わり方を考えさせられた。又、仕事とどう向き合うか考えさせられた。

・講師の園長先生がとても素敵な方で、お話に引き込まれました。単にプロジェクトが面白い、他でやっていない、というのではなく、その基礎となっている“保育のあり方”をしっかり知ることができ、また現場での話も多くあり、自分自身で考えるきっかけになりました。

・正直なところ、幼児教育という分野はほとんど知らなかったのですが、現場の実践に基づいたとても分かりやすく面白いお話で安心するとともに、揖斐幼稚園に実際に行ってみたいという気持ちになりました。佐木先生が、ご自身の考えと実践に誇りをお持ちであり、働いている先生方を大切にしているのを知り、こういう方だからこそ人がついてきて、そのお考えも形になるのだなと感じました。揖斐幼稚園にぜひ行ってみたいと思いました。

・先生の人柄が素晴らしく、こんな保育者になりたいと憧れる人、理想とする姿を見ることができました。やはり１日も早く現場に出たいなあと思いました。

・「発見と冒険 project」の実践だけではなく、園長である佐木先生の「新任教師の養成」に対する取り組みや、現場の教師に対する想いに感銘を受けた。まさに、自分の子ども観・保育観を探求している身の私にとって、今日の講演はとても有意義なものだった。刺激を受けるところや背中を押されるようなところもあり、参加できて本当に良かったと思う。
・非常に貴重なお話をお伺いできてよかったです。特に子どもと向かい合って交流するというよりも、子どもと並んで交流することの大切さが、私には大きな発見でした。また、子どもだけでなく職員を大切にする姿勢が、園の人を尊重する雰囲気を作り出していると思いました。
・佐木先生の保育に対する考え方、また保育者に対する教育方針に感動しました。そして、改めて子どもの創造力の大きさ、また無限に広がる可能性を感じたとともに、子どもに関わる仕事に就きたいという気持ちがより強くなりました。参加させていただけて本当に良かったです。
・保育だけでなく保育者の教育にも想いがあることや、とても貴重な保育観も聞かせていただけ、とても感謝しています。率直なことを言うと、じーんと感動しました。
・幼稚園の先生になりたくなるような、素敵なお話でした。幼稚園児や職員の方々への愛が感じられました。生活体験の差が、個人差として現れるという考え方に、とても納得しました。
・新人教師への対応・教育などの現場の生の声が聞けてとても参考になった。幼児を「対等な他者」として捉えるというのが印象的だった。
・佐木先生の保育観・子ども観が聞けて良かったです。保育者の経験が豊富な佐木先生のお話が聞けて、保育者としてどうあるべきか考えるきっかけになりました。ありがとうございました。

3.　総括

佐木みどり先生には、長年の保育者としての生活を通して培われたご自身の保育観について、子どもの発達を概観しながらお話しいただいた。幼児期にふさわしい生活とは何かを考え、子どもたちの日常生活の中に「はっけん」と「ぼうけん」が息づくことを支えるための実践を紹介いただき、参加者それぞれが幼児教育のあり方について、自身の求めている理想だけでなく、その基盤となる理論といった足元を見つめなおすよい機会になった。また、揖斐幼稚園でのフィールドワーク研究を長年行っておられる東村知子先生（奈良女子文化短期大学　准教授）も迎えての質疑応答では、幼児教育の現場で新人が学んでいくべきことや、どのように新人を育てていくのかといった、参加者たちの将来のキャリアを見据えての討論が活発に行われ、非常に有意義な講演会となった。

（文責：柘植　彩）